

真宗學

第 128 號

親鸞における「仏智不思議」

——「はからひ」とは何か——……………藤 能 成

煩惱成就と不断煩惱得涅槃 ……………玉 木 興 慈

近世初期真宗教学の変貌

——『私観子』からの考察——……………三 浦 真 証

存覚における父母に対する報恩思想

——『報恩記』を中心として——……………谷 口 智 子

Freedom and Safe-guardedness in Shinran and

Heidegger ……………Dennis HIROTA

平成 25 年 3 月

龍谷大學 真宗學會

目次

親鸞における「仏智不思議」

——「はからひ」とは何か——……………藤 能成(一)

煩惱成就と不断煩惱得涅槃……………玉木興慈(七)

近世初期真宗教学の変貌……………三浦真証(五)

——『私観子』からの考察——……………谷口智子(八)

存覚における父母に対する報恩思想……………

——『報恩記』を中心として——……………

真宗学会第六十六回大会研究発表要旨……………(一〇四)

平成二十四年度真宗学講義題目……………(一一〇)

平成二十三年度真宗学専攻者修士論文・卒業論文題目一覧……………(一二六)

編集後記……………(一三三)

Freedom and Safe-guardedness in Shinran and Heidegger
……………Dennis HIROTA (一)

真宗学会第六十六回大会研究発表要旨

『教行信証』所引の『讚阿弥陀仏偈』について

富島 信海

『教行信証』の研究は、存覚『六要鈔』以来長年積み重ねられ、御自釈や引用経論釈の内容から、教義体系や組織の解釈が試みられてきた。一方、明治以降は書誌学的あるいは文献学的研究が進展し、坂東本における字体の特徴、半面当たりの行数などから、前期・中期・後期の筆跡変遷が明らかにされてきた。本発表は、文字単位の筆跡研究をベースに、行単位の形式変化に着目し、坂東本や西本願寺本の書式から引用経論釈の構造把握を試みるものである。今回は疊鸞が『大経』を元に製作した偈頌であり、偈文形式で引用されて然るべき聖教である『讚阿弥陀仏偈』を検討の対象とする。

『讚阿弥陀仏偈』が『教行信証』に引用される場合、坂東本では偈文形式で示されず、西本願寺本においても偈頌と長行の別があり、文中の形式変化も認められる。

まず、『教行信証』全体の「偈頌体」を確認すると、坂東本初期に見られる書写形式である。坂東本では、一切経等の

版本や『見聞集』等の自筆手控え抄出要文に見られる偈頌の引用形式を一部採用するが、改行や偈頌体自体が少ない。このことから、坂東本には偈頌や改行を用いて積極的に何かを示すという明確な意図はなく、引用文の収集・書写に重点を置いた「草稿本」と位置づけることができる。

一方、西本願寺本は、親鸞没後の文永十二年(一二七五)に書写された「清書本」であり、坂東本の字形を捉えて臨模したものである。ただ、その体裁は坂東本と大きく異なり、

① 引文導入語「言」「曰」「云」の後に改行を施す

② 版本や手控えの抄出要文、親鸞真蹟等の形式に倣い、多くの偈頌体を用いる

③ 本来偈頌でない本願成就文を含み、多くの偈頌体を用いる

という特徴がある。西本願寺本は、こうした書写方針をもって『教行信証』を書物として整備・編集した本でもあった。この書写方針は『讚阿弥陀仏偈』の引用にもあてはまる。引用の冒頭では、引文導入語「曰」の後に改行を施して書名を明示し、更に作者名・名号・細註を書き加えるという、他の聖教に見られない独自の形式を用いていた。

そこで、『教行信証』中五回の引用箇所を検討すると、引文導入語「曰」と「云」に大別でき、前者は偈頌、後者は長行とし

て引用されていた。特に偈頌体の多い西本願寺本においては、信巻大信釈の偈頌体六句（三行書き）は、先に十句（五行書き）の偈頌体で示された本願成就文と形式と内容の両面に対応していた。

また、真仏土巻真仏土釈では、本文初めの四句（二行書き）、成仏以来歴十劫 壽命方將无有量

法身光輪徧法海 照世盲冥故頂礼

（『本願寺藏顯浄土真実教行証文類』縮刷本、六二二頁）が偈頌体、残りが散文形式で示されていた。この形式から、真仏土巻においても信巻大信釈と同様に願成就文と対応しているのではないかと考えられる。

そこで、真仏土巻『讚阿弥陀仏偈』の構造についての考察を試みた。従来の解釈では「乃至」前後で大別する理解や三分科する理解が多い。しかし、西本願寺本の偈頌体四句の形式に着目してその内容を吟味すると、総説に当たる偈頌体四句には、願成就文を助顕して光寿二無量の徳を示す役割があった。それに続く別讀の長行部分では、十二光を含む仏十九名と「南無不可思議光」の仏名を示し、光寿二無量の徳を詳説する役割があった。

この書写形式は、『浄土和讃』徳号列示における『讚阿弥陀仏偈』引用と同じ形式であり、偈頌体四句と長行・抄出の順に書写する点で同じ構造を持っていた。こうして、偈頌体四句で光寿二無量を示し、続いて仏名を提示する点で内容面でも共通しており、真仏土巻では、菩薩莊嚴・国土莊嚴中の仏名も省略

しない『浄土和讃』徳号列示のように、『讚阿弥陀仏偈』全文を引用する意があったといえる。坂東本に改行・偈頌体自体が少ないこと、『讚阿弥陀仏偈』独自の引用法、西本願寺本の書写方針、専修寺本の書写形式を加味すると、西本願寺本の構造が『教行信証』としての構造であり、親鸞の意図によるものと考えられることができる。

このように、引文導入語「曰」で始まる『讚阿弥陀仏偈』の引用は、西本願寺本で用いられた偈頌体が、先に引用された本願成就文や一連の引用である第十二・十三願成就文の引用に対応しており、願成就文を助顕するための論書と見ることができ

る。最後に、『教行信証』における引文指示語と経論釈の対応関係を考えると、『讚阿弥陀仏偈』は本来釈書（人師）による「云」で引用されるべき書である。しかし信巻大信釈や真仏土巻の引用では、引文導入語「曰」を用い、曇鸞造であることを明記し、「無量寿傍経」と名づけ、書式の上でも西本願寺本等で偈頌体を用いている。これらは、親鸞が『讚阿弥陀仏偈』を仏経に準じた偈頌と位置付けたことを意味し、菩薩の論書として引用するために用いた形式的な特徴ではないだろうか。

『念仏鏡』の一考察

——善導教学との関連を中心に——

博士後期課程三回生 山崎 真純

中国、唐代の浄土教者である善導は、『観経疏』「散善義」の中で、称名念仏を正定業と位置づけている⁽¹⁾。その根拠として、『無量寿経』第十八願を『往生礼讃』で、「念」という語を「称」と言い換え、第十八願を根拠とした称名念仏を打ち出している⁽²⁾。この善導の「称名正定業」の説を含め、善導の後世への影響について柴田泰氏の研究があり、各書物の浄土教の系譜を挙げ、その系譜の中で善導の位置づけについて言及をされている⁽³⁾。

それに対して本発表では、念仏に特化して書かれた書物である『念仏鏡』から善導の後世への影響を窺いたい。『念仏鏡』は善導が亡くなって約一〇〇年後に書かれた書物であり、それを見ることよって善導の念仏思想の影響の有無が確認できると考えられるからである。

『念仏鏡』の著者は、道鏡、善道であり、成立年代は八世紀末〜九世紀初頭とされる。構成は、「本」(「第一 勸進念仏門」)、「第九 広撰諸教門」(「末」)、「第十 釈衆疑惑門」・「第十一 念仏出三界門」に分かれ、「第十 釈衆疑惑門」はさらに六門に分けて、三階教や弥勒信仰、禅宗など他の思想的立場と浄土

教とを比較して、浄土教の優越性を示す書物である。

まず、善導の念仏思想を鑑みると、五部九巻それぞれにおいて異なっている。『観念法門』・『般舟讃』・『法事讃』では念仏相続、称名相続による見仏成就を説いている。『往生礼讃』では『文殊般若経』の引用後に、凡夫は観想念仏より称名を行うことを示して、行者の「専称名字」による往生を明確なものとする⁽⁸⁾。『観経疏』では「称仏の功」を述べ、称名こそが仏の本意に外ならないことを強調する。また五種の正行こそ浄土往生の行業であって、それ以外の行業は悉く雑行であり、浄土の行業ではないとする。さらに五正行を助業と区分して、称名行こそ本願に順ずる正定業であって、残りの四つの正行は、称名行を助成する行業にすぎないとする⁽⁹⁾。

『念仏鏡』では、「第五 校量功德門」において、如来の八万四千の法門は念仏の法門に望めば、自余の雑善は少善根、唯念仏一門のみ多善根多福德であるとし、称名念仏の超勝性を示す⁽¹⁰⁾。また、「第八 誓願証教門」では、善導と金剛における念仏の勝劣の対話を挙げて、称名念仏による往生の真実を現証する⁽¹¹⁾。そして『念仏鏡』の中、経論で多く引用されるのは『観無量寿経』・『阿弥陀経』の取意の文である。『無量寿経』の文として取意で引用されるのは、「乃至一念、即生浄土」の一ヶ所である。つまり、善導が『無量寿経』第十八願を根拠とした称名念仏を打ち出したのに対し、『念仏鏡』では盛んに念仏の勝行性を述べる。しかし両者は、称名念仏が阿弥陀仏によつて誓われた行とするか否かの点において大きく異なる。

加えて『念仏鏡』では大行の教説が多く見られる。即ち「第八 誓願証教門」では、「信憶称敬」の四字をもつて標語とし、心に深く信じ、仏を憶念し、口に名号を称し、身に恭敬すべきことが説かれる。また善導（道）の教説として『念仏鏡』で出てくるのは四箇所に対して、大行の教説として『念仏鏡』に出てくるのは一箇所である。また、「第十 釈衆疑惑門」において、他宗から念仏の論難への批判を展開する際に、「大行和上在日」¹⁶として、他宗の人々を論破して、念仏に帰依させたとの記述がある。『念仏鏡』では大行の教説を引用すると共に、大行の事蹟を讃えるものと考えられる。

さらに『念仏鏡』「第三 念仏得益門」では、『善導（道）闡梨集』として念仏の利益論が説かれている。¹⁷善導の五部九巻における利益の記述と比較すると、『念仏鏡』で引用される『善導（道）闡梨集』の二十三種の念仏利益の内、「三 大師護念益」・「十 奉覲大雄益」以外は述べられているように思われる。しかし善導は、利益を現当に分けているのに対して、『善導（道）闡梨集』では全て羅列して書かれていること、また観仏やその他の諸行の利益も全て念仏の利益としてとらえられている。

以上のことを纏めると、『念仏鏡』には善導の念仏思想が見受けられず、むしろ大行という人物の念仏思想が強く窺えた。また善導の利益論と比較した場合でも、『念仏鏡』では称名念仏の利益に特化しすぎる余り、善導の思想の影響は見られないと考える。

註

- (1) 『大正蔵』卷三七―二七二b六―八
- (2) 同四七―二七a一七―一九四四七c二四―二五
- (3) 柴田泰稿「中国浄土教の系譜」(『印度哲学仏教学』第一号所収、一九八六年)
- (4) 『大正蔵』卷四七―二四b五―二四
- (5) 同―四五四a六―七
- (6) 同―四二八a一―二
- (7) 同八―七三b一―五
- (8) 同四七―四三九a二四―b一四
- (9) 「定善義」(『大正蔵』卷三七―二六七c一五―一八)、
「散善義」(同―二七六b二九―c四、二七八a二四―二六)
- (10) 『大正蔵』卷四七―二三c二―二四c九
- (11) 同―二五c二―二九
- (12) 同―二二a二七―二八等。
- (13) 同―二〇a一九―二三等。
- (14) 同―二二a二九
- (15) 同―二五c二九―二六a四
- (16) 同―二七c一八等。
- (17) 同―二三a四―一六

親鸞の『論語』引用について

龍谷大学大学院 菊川 一道

親鸞は『教行信証』の「化身土文類」末(以後「外教釈」と表記)の末尾に『論語』を引用して、人は鬼神に事えてはならないと教誡する。現代的視点からみると、外典の説示を仏教の経論釈と同等に、肯定的に扱う手法は一見理解し難い。親鸞がわざわざ『論語』を引用した理由は何だったのか。先行研究はその殆どが『論語』引文の訓み替えに注目しつつ、親鸞が徹底的に鬼神への不帰依を主張したことを指摘するにとどまる。本研究では「外教釈」に『論語』が引用された意図について、親鸞在世時の時代背景、就中「洛都儒林」との関係の中で明らかにする。

親鸞が生まれた日野家は代々儒学を家学として継承していることから、親鸞は幼少期より儒学に対する知識を有したと考えられる。そのような中で、親鸞は儒教をどのように位置づけるのか。その問題を解き明かす内容が「外教釈」所引の「弁正論」にみられる。ここでは「迦葉を老子とす、儒童を孔子とす」などと示されており、親鸞が孔子を菩薩の化身としてみていたことが窺える。しかし続く引文で、孔子の教説は仏道に通じるものだが、役割を果たして既に「邪」であるとされる。このことから、親鸞にとって『論語』はまず仏教の範疇で捉えら

れていたことが明らかとなる。故に、仏道にルーツを持たない純粋な外典と、『論語』とでは親鸞の中で明確な相違があったことをまず指摘しておきたい。

では、そのような『論語』を敢えて引用した親鸞の意図とは何か。「外教釈」は修多羅に基づいて、旧仏教を始めとする中世当時の僧侶たちが、仏弟子でありながら神々を尊敬する態度を批判する意があるとされる。しかし、仏弟子に対する教誡が目的であれば、寧ろ仏典の方が有効であろう。実際に「外教釈」では仏典に基づいて、神々への不帰依が繰り返示されるそれにもかかわらず『論語』が用いられた背景には、当時の儒学者に対して主張を行う意図があったものと考えられる。

事実、親鸞は当時の儒学者のことについて「後序」の中で言及する。ここでは「興福寺奏状」を受けて、天皇や公卿が法難を惹起したことが明かされ、ここに当時の儒学者たちが連座していたことが示される。

中世において、天皇には学問を教授する学者として「侍読」が置かれ、代々儒家がその責務を担っていた。当時の朝廷に仕えた人物を官職別に明かす「公卿補任」では、藤原親経(一一五一—一二二〇)が式部大輔等を歴任し、承元の法難で問題となった後鳥羽・土御門二朝の侍読を務めたことが明らかにされる。このことから、儒学者たちは、天皇に儒学を教授し、補佐する集団であったと位置づけやすい。

次に、そのような朝廷における位置づけをもつ「儒林」と、『論語』引文の関係を考える際に浮かび上がるのが、「興福寺

奏状」の「第五背盃神矢」の項目である。ここでは法然教団の「神祇不拜」の態度を徹底して批判される。「主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ」と親鸞が批判したように、奏状の説を受けて、承元の法難を儒学者たちが後押ししたのであれば、『論語』引文の内容は、儒学の立場からみて、専修念仏集團の神祇不拜が正当であることを主張するものであると理解できる。

さらに、『論語』引文の意図として「儒林」との関係で考えられることは、儒学者たちの鬼神祭祀に対する批判である。儒教における「鬼神」の位置づけは、「死者」との関係の中で捉えられてきた。実際、親鸞も「外教釈」所引の『天台四教儀集解』の中で「鬼神」を「死者」と関連づけて理解する。このことから、「鬼神につかえてはならない」との『論語』の説示は、死者につかえることを否定する文として理解することが可能である。

土御門天皇などの侍読を務めた菅原為長（一一五八—一二四六）は、『天神講式』という書物を編纂したことも知られる。この講式は菅原道真の霊を祀り、神霊を慰め、神徳を蒙ろうとする会式の次第に他ならない。このことはまさしく、為長を始めとして、当時の儒家たちが鬼神祭祀に積極的に関つた事実を示すものと理解していいだろう。親鸞は「正像末和讃」などでも当時の道俗が鬼神祭祀を行う様子を批判する。また、「高僧和讃」（源空讃）からは、「儒林」が、「釈門」とともに、真実の法門へ入るべき存在として親鸞の中で位置づけられているこ

とも窺える。これらのことから、「行に迷ひて邪正の道路を弁ふることなし」と親鸞が「後序」で述べたように、『論語』引文は、彼らの鬼神祭祀に対する批判を内包していたと考えられる。

以上の検討より、親鸞の『論語』引文は儒学者たち、或いは天皇や仏教徒を含む当時の知識人に対して、彼らの鬼神祭祀の様相を批判し、同時に法然教団の「神祇不拜」の正当性を顕示する意図があつたと結論付けられる。

平成二十四年度真宗学講義題目

【真宗学専攻】

○真宗学特殊研究

A・正統・異端の弁証法 (M)

B・宗教生活と世俗、生命 (M)

A・親鸞思想への比較宗教論的アプローチ (M)

B・親鸞思想への比較宗教論的アプローチ (M)

A・親鸞における「信心獲得」の思想 (M・D)

B・親鸞の生命観と死生観 (M)

A・「行文類」の諸問題 (1) (M・D)

B・「行文類」の諸問題 (2) (M・D)

A・「釈浄土群疑論」の研究 (M・D)

B・「釈浄土群疑論」の研究 (M・D)

A・法然浄土教の特色を理解する (M・D)

B・法然浄土教の特色を理解する (M・D)

○真宗学演習

○真宗学特殊研究

A・「釈浄土群疑論」の研究 (M・D)

B・「釈浄土群疑論」の研究 (M・D)

A・法然浄土教の特色を理解する (M・D)

B・法然浄土教の特色を理解する (M・D)

○真宗学演習

『教行信証』の研究 (M・D)

○真宗伝道学演習

真宗伝道学の基礎的研究 (M)

○真宗学演習

『顕浄土真実教行証文類』 (M・D)

○真宗学演習

真宗学演習—真宗百論題の研究— (M・D)

○浄土教理史演習

『教行証文類』の教理史的研究 (続講) (M・D)

○真宗学文献研究

A・親鸞と《無量寿経》 (M)

B・親鸞著作を英訳とともに読む (M)

A・親鸞の消息を読む (M)

B・親鸞の消息を読み取る (M)

A・親鸞の手紙と『教行信証』の思想 (M)

B・親鸞の手紙と『教行信証』の思想 (M)

A・「行文類」の読解 (M)

B・「行文類」の読解 (M)

A・親鸞思想における信の研究 (M)

B・親鸞思想における信の研究 (M)

A・「六要鈔」の研究 (上) (M)

B・「六要鈔」の研究 (下) (M)

林 智康

深川 宣暢

龍溪 章雄

内藤 知康

川添 泰信

ヒロタ デニス

ヒロタ デニス

井上 善幸

井上 善幸

藤 能成

藤 能成

殿内 恒

殿内 恒

玉木 興慈

玉木 興慈

武田 晋

武田 晋

A・『教行信証』「信巻」の思想Ⅰ (M) 鍋島 直樹
 B・『教行信証』「信巻」の思想Ⅱ (M) 鍋島 直樹

○大乗仏教論研究 エンゲージド・ブッダイズム(社会参
 加型の仏教)の可能性に向かって 桂 紹隆
 ○浄土教思想論研究 浄土教理史の基本的研究 川添 泰信
 ○現代社会論研究 現代社会と宗教 亀山 佳明
 ○宗教心理学研究 宗教多元主義 高田 信良
 — 宗教経験の諸相 — 海谷 則之

○伝道学特殊研究
 A・真宗伝道学の基礎的研究とハワイ伝道の実践的
 研究 (M) 川添 泰信
 B・真宗伝道学の基礎的研究とハワイ伝道の実践的
 研究 (M) 川添 泰信

○宗教教育学研究 宗教と人間形成 藤本 信隆
 ○仏教伝道史研究 アジア仏教の近現代史の学びから伝道
 の課題を考える 林 智康
 ○真宗伝道史研究 浄土真宗と伝道 龍溪 章雄
 ○真宗教団論研究 真宗教団の存在意義 松尾 宣昭
 ○倫理学研究 現代倫理学入門 高田 信良

実践真宗学研究科

〈基礎研究科目〉

○実践真宗学総合演習Ⅰ

○専門研究科目(宗教実践活動分野)〈

(ア)実践真宗学の分野と方法

○布教伝道論研究 真宗の伝道における基本的理解と実践

鍋島直樹・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島 理

(イ)実践真宗学の分野と方法

○組織活動論研究 寺院活動の基本 貴島 信行

田畑正久・葛野洋明・貴島信行・鍋島直樹・早島 理

○実践真宗学総合演習Ⅱ

○情報メディア論研究 宗教と情報メディア 三上 章道

(ア)実践真宗学の分野と方法

○文書活動論研究 都市における浄土真宗の伝道実践 宮本 義宣

鍋島直樹・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島 理

(イ)実践真宗学の分野と方法

○都市開教論研究 都市における浄土真宗の伝道実践 西 義人

田畑正久・葛野洋明・貴島信行・鍋島直樹・早島 理

○実践真宗学研究 実践真宗学の基礎的研究 深川 宣暢

○宗教儀礼論研究 宗教儀礼の諸相と意義 小野 真

○真宗教義学研究 真宗教義 内藤 知康

○寺院活動論研究 善井 信明

○現代宗教論研究 宗教多元主義 高田 信良

— 浄土教における宗教の教学 —

○宗教法人運営論研究

I 現代社会における宗教法人運営の基礎研究 山口 卓

II 保漭 祐尚

○宗教実践特殊研究

A・マスコミにおける宗教情報の研究

—新聞情報を中心に— 深川 宣暢

B・宗教実践活動の理論と方法 —国際伝道から窺う現代における伝道研究—

葛野 洋明

C・真宗と西洋の出会い ヒロタ デニス

D・本願寺教団の近代化と教団改革論 中西 直樹

E・浄土真宗寺院の活動 大谷 光淳

F・言語表現スキルの獲得(音声表現・活字表現) 仲山 豊秋

H・真宗伝道学の基礎的研究とハワイ伝道の実践的研究 川添 泰信

I・真宗伝道学の基礎的研究とハワイ伝道の実践的研究 川添 泰信

○宗教実践演習I

A・親鸞教義の理解

—何を聞き何を伝えるのか— 鍋島 直樹

B・『歎異抄』にみられる真宗伝道の実践と課題 貴島 信行

C・国内外の布教伝道の実践的側面に関する課題とそ 葛野 洋明

○宗教実践演習II

A・真宗伝道につながる親鸞の死生観と人間観の研究 鍋島 直樹

B・法座伝道における実践方法 貴島 信行

C・布教伝道の実践的側面を取り上げ、国内外の宗教実践の課題に関する研究指導を行う 葛野 洋明

○宗教実践実習

A・真宗伝道の実際 深川 宣暢

B・真宗と布教・寺院活動 清岡 隆文

C・各自の研究テーマに即した実習を行う。そのために綿密な実習の計画を立てる。実施して報告を發表し、全体討議を通して研究を深める。 葛野 洋明

○宗教実践演習III

A・真宗伝道の実践的研究 深川 宣暢

B・宗教実践の現状と展望 清岡 隆文

C・国内外の宗教実践の課題を通して、布教伝道の実践的側面を取り上げ、各自の研究テーマが高い学術性をもった研究成果となるよう指導を行う 葛野 洋明

○真宗人間論研究 真宗の人間観

内藤 知康

〈専門研究科目(社会実践活動分野)〉

○真宗人間論研究 真宗の人間観 内藤 知康

○生命倫理論研究 生命倫理・倫理・宗教 早島 理

- 共生論研究 宗教と共生的環境創生 土屋 和三
- 人権・平和論研究 仏教における人権論と平和論の可能性 杉岡 孝紀
- ビハラー活動論研究 親鸞思想を基盤としたビハラー活動 鍋島 直樹
- カウンセリング論研究 宗教とカウンセリング援助技術 友久 久雄
- 生涯学習論研究 寺院と学習活動 持田 良和
- 臨床心理学研究 臨床心理学の理解と実践上の基本問題 森田 喜治
- 発達心理学研究 人間と成長・発達の諸問題 滋野井一博
- 人格心理学研究 人格変容の問題と宗教 吉川 悟
- 矯正論研究 刑事施設における犯罪者の社会復帰石塚 伸一
- 社会福祉論研究 社会福祉の現状理解と社会福祉論の検討 清水 教恵
- ボランティア・NPO活動論研究ボランティアとNPO と宗教 古川 秀夫
- こども社会学研究 持田 良和
- 社会実践特殊研究
 - A・近代仏教の社会実践運動 龍溪 章雄
 - B・生老病死と終末期医療 早島 理
 - C・真宗と正義
- D・日本人の宗教性と真宗の信仰 西洋との比較の観点から考える― ヒロクダニス 金児 暁嗣

- E・社会の諸問題と仏教の現代的意義 田中 教照
- F・現代社会に対応する寺院の実践活動 高橋 卓志
- G・福祉実践のための理論研究 長崎 陽子
- 社会実践演習 I 田畑 正久
- A・社会実践について 早島 理
- B・仏教思想と生命倫理 I 田畑 正久
- 社会実践演習 II 田畑 正久
- A・実習に向けて 早島 理
- B・仏教思想と生命倫理 II 田畑 正久
- 社会実践実習 田畑 正久
- A・実習に向けての検討・討議 吾勝 常行
- B・ビハラー・カウンセリング 吾勝 常行
- 社会実践演習 III 田畑 正久
- A・修士論文及び報告書の作成 田畑 正久
- B・ビハラー実践活動 吾勝 常行
- 布教使課程科目 義本 弘導
- 真宗教団活動論 布教使資格に関する諸講義 義本 弘導
- 文学部真宗学科
 - 真宗学概論 A 林 智康
 - 真宗学概論 A 浄土真宗の体系と実践 深川 宣暢
 - 浄土教理史 浄土三部経および七高僧の浄土教理の展開 川添 泰信
 - 浄土教理史 浄土三部経および七高僧の浄土教の展開 川添 泰信

○真宗教学史 親鸞思想（真宗教義） 解釈史の批判的概説 井上 見淳

○浄土教聖典学概論 浄土教聖典の成立と展開 龍溪 章雄

○真宗聖典学概論 親鸞・覚如・存覚・蓮如の説き示した教え 河智 義邦

○浄土教概論 法然門下の浄土教を中心として 貫名 謙

○真宗伝道学 浄土真宗は、現代人の苦悩と問いにどう応えるのか？ 武田 晋

○比較思想論 親鸞思想への比較思想的アプローチ 藤 能成

○教理史特殊講義 那須 英勝

A 佐々木義英

B・東アジアの浄土教信仰と日本人の宗教性

グランバックリサアン

○教学史特殊講義 原田 哲了

A・覚如教学の研究 長岡 岳澄

○教義学特殊講義 B・教学史における伝道

A・親鸞の人間観と救済観 鍋島 直樹

—悲しみの世界に寄り添う— 黒田 義道

B・親鸞の教導者観の諸問題

C・グリーンフケア論打本 未来

○伝道学特殊講義

A・医療・看護・福祉の領域で仏教の救いはどう実現するか 田畑 正久

B・私と世界 早島 理

○教理史講読 A・講読安樂集 龍口 恭子

B・『西方指南抄』を読む 清水谷正尊

C・『往生論註』を読む 溪 英俊

○教学史講読 C・『御文章』の講読 岩田 真美

B・『蓮如上人御一代記聞書』の講読 能美 潤史

○教義学講読 A・『教行信証』上、「教巻・行巻・信巻」 佐々木寛爾

B・『一念多念文意』を読む 普賢 保之

D・三帖和讃を読む 長岡 岳澄

E・『尊号真像銘文』を読む 岡崎 秀麿

○伝道学講読 A・口伝鈔を読む 藤丸 智雄

B・『御伝鈔』を読む 貴島 信行

C・親鸞聖人御消息に学ぶ 武田 一真

○真宗学講読(A) 口伝鈔を読む 藤丸 智雄

○真宗学基礎演習I(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ) 眞宗入門

○真宗学基礎演習II(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ) 「正信念仏偈」を学ぶ

那須英勝・高田文英・井上見淳・武田 晋・岩田真美

○真宗学基礎演習II(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ) 「正信念仏偈」を学ぶ

那須英勝・高田文英・井上見淳・武田 晋・岩田真美

○真宗学基礎演習II(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ) 「正信念仏偈」を学ぶ

高田文英・那須英勝・杉岡孝紀・井上見淳・藤能成
○教理史演習Ⅰ

(ア)『無量寿経』を読み解く

―浄土教理史の原点の探究―

(イ)『選択本願念仏集』を読む

○教学史演習Ⅰ

(ア)『歎異抄』を読む

(イ)蓮如上人の『御文章』を読む

○教義学演習Ⅰ

(ア)親鸞聖人の御消息(書簡)

(イ)親鸞教義の普遍性と特殊性

○伝道学演習Ⅰ

(ア)真宗伝道の基礎的研究

(イ)真宗伝道学の研究 嵩 満也

(ウ)親鸞と蓮如の書物を通して生き方を学ぶ

○卒業論文(教理史演習Ⅱ)

(ア)真宗学の諸問題

(イ)法然教義と親鸞教義

○卒業論文(教学史演習Ⅱ)

(ア)蓮如上人の教学と伝道

(イ)

○卒業論文(教義学演習Ⅱ)

(ア)親鸞教義の基礎的研究

(イ)親鸞思想と現代世界―真実の探求

○卒業論文(伝道学演習Ⅱ)

(ア)浄土真宗に関する諸問題

(イ)現代社会における浄土真宗の伝

○真宗学概論B 真宗を学問として学ぶ

○布教伝道論

I 浄土真宗における布教伝道の基礎と諸相

II 浄土真宗における布教伝道の理論と実際

○真宗教団史

○自然系講義科学のひろば

鍋島 直樹

殿内 恒

道藤 能成

玉木 興慈

葛野 洋明

貴島 信行

三浦 真証

土屋 和三

深川 宣暢

那須 英勝

林 智康

玉木 興慈

龍溪 章雄

高田 文英

林 智康

井上 善幸

川添 泰信

平成二十三年度 真宗学修士論文・卒業論文題目一覧

論文題目	姓名
大学院修士論文 曇鸞と華嚴思想 曇鸞教学における空思想の研究	土井 慶造 長宗 博之
曇鸞と聖覚の研究 —特に僧肇の二諦論理の受容と展開—	西河 唯
親鸞における菩提心理解について	軌保 順教
親鸞における末法思想の意義	松並 照樹
The Propagation of Shin Buddhism in Chinese	王 仁興
親鸞教学における現生正定聚の意義	藤原ワンドラ 睦
—北米開教区における布教活動経験にもとづいて—	本山 成郎
武内義範の三願転入について	楠 誓祐
宗祖教義における無明義の考察	橋口 洋
親鸞浄土教とVajrapāṅkulaにおける「転機」の考察	
—危機転換の視点から親鸞浄土教を現代へ向けて語り なおす試み—	熊谷 了淳
道綽における聖浄二門判の受容と展開	了淳
親鸞における善悪について	佐藤 明功
信願論の研究	谷 實照
善護師における大行論の一考察	讚井 亮
実践真宗学修士論文 貧困と痛みに寄り添う宗教 伝道における「御文章」の意義	岩田 彰亮 辛嶋 祐信
浄土真宗伝道における人間関係の研究	楠 正照
現代の文芸にみる宗教性の研究	小松 正宣
真宗における法話伝道の研究	梶 俊道
寺院活動の可能性	龍尾 崇
現代真宗実践論研究	丹宮 教信
真宗における教誨の研究	禿川 尊法
障がい者に対する真宗伝道のあり方	内藤 良誠
仏教と差別	仲尾 萌恵
—同朋運動とインド仏教復興運動の交流と展開—	
宗教教育の研究	中山 光信
—「浄土真宗関係学校 宗教科教員聞き取り調査」を 通して—	永田 弘彰
現代における実践伝道研究	

浄土真宗の教えに生きるとは

― 妙好人を中心として ―

宗教教育の研究

― 仏教保育を中心に ―

現代における伝道

― インターネット伝道の可能性と課題 ―

自死問題と仏教者の役割

浄土真宗の僧侶における社会的役割

― ビハーラに学ぶ ―

医療・看護・介護に携わる人に仏教・真宗をどのように伝

えていくか

女性と仏教

― DV被害者支援の現場から ―

蓮如に学ぶ

― 『御文章』を読む ―

地域コミュニティの再構築

― 願いが息づく共同体

臨床現場における仏教アートケアの意味

断酒会活動におけるスピリチュアリティ

― 私の課題と念仏のいただき ―

文学部真宗学科卒業論文

慈悲についての一考察

― 衆生における慈悲のかたち ―

原 大法

原田 弘道

平野 将庸

廣谷ゆみ子

深川 行暢

松谷 教生

井上 啓子

岡本 隆英

川端 勝

筑後 朋友

丸田 和夫

浅野 真弥

浅野 真弥

六字釈の一考察

親鸞聖人における地獄理解

節談説教について

親鸞の信心と念仏について

― 六字釈を中心に ―

親鸞の臨終観

― 源信・法然と比較して ―

浄土真宗とビハーラの可能性

真宗信心の現代的意義

現代における宗教の意義

― 浄土真宗をめぐる課題を中心として ―

親鸞の人間観について

― 曇鸞・善導・法然の人間観との比較 ―

悪人正機説から見る他宗教の善と悪の倫理観

『親鸞聖人御消息』第六通からみる現代の伝道

親鸞の同朋精神と現代社会

真宗における葬儀観

本願寺教団の東西分派について

七高僧と聖徳太子

― 真宗の祖師観形成の一考察 ―

善鸞の義絶について

現代人と宗教

― 仏教・真宗の在り方 ―

真宗と現代人の人間観

安藤 愛

池西 由湖

池本 史雅

石井 真章

市野 覚生

伊藤 明子

稲葉 陽香

稲葉 亮介

井上 翔司

岩男 真智

岩尾 利章

岩田 恒

上田 智士

上田 翔平

上田 恭成

上野 翔三

占部 清子

大島 理恵

大島 理恵

法然と親鸞の他力念仏思想

岡 悠樹

真宗教団と社会問題

桑原 孝尚

七祖教学を背景とする親鸞の思想

岡野 悠一

親鸞の訓読理解

河野 弘貴

真宗荘嚴の未來像

岡部 香

現代における伝道の課題とその意義

河野 惠憲

— 真宗各派を比較して —

奥田 彩花

浄土真宗と人々の心の救済

鷺村 智祥

ビハラの重要性とこれから

奥田 縁

— カウンセリングとしての親鸞の教え —

作田 尚恵

現代社会と浄土真宗

奥田 縁

親鸞と蓮如における救い

佐々木亜希子

— 現代社会における浄土真宗の存在意義 —

小椋 厚太

真宗伝道におけるグリーフケアの可能性

佐々木順悟

親鸞の他力思想の一考察

小原 顕真

浄土真宗における戦時教学

佐々木祐成

真宗からみた死刑制度の一考察

片山 京子

葬式における真宗伝道の可能性

佐藤 弘樹

浄土真宗におけるグリーフケアの考察

金田 隆寛

真宗と医療の一考察

眞岡 陽明

法然上人門下についての一考察

亀原 涉海

仏教の死生観からみる現代における死の受容

椎葉 良寛

— 聖覚・隆寛両師を中心に —

河本 麻由

現代における真宗伝道の意義

塩崎 脩平

『歎異抄』に見られる親鸞思想の一考察

亀原 涉海

真慧上人の念仏観

篠原 法樹

家族と親鸞

河本 麻由

法然から親鸞への一考察

島 昂大

— 親子として見る親鸞と善鸞 —

綿依 龍馬

親鸞の生死観

清水 智啓

親鸞の往生思想

綿依 龍馬

仏教讃歌の意義

清水 智啓

— 現生正定聚を中心に —

岸本 美香

— 浄土真宗における仏教讃歌の必要性 —

下野 洋資

親鸞聖人と現代

岸本 美香

現代における浄土真宗の可能性

鈴木 恵海

親鸞聖人の人間観

喜多村 奏

— 自死の問題を通して —

鈴木 恵海

— わたしにおける、その意味について。 —

北村 貴司

真宗の死生観

鈴木 恵海

蓮如上人の研究

木田 悠斗

— 幸福な死を迎えるための準備教育 —

鈴木 楓

現代社会における伝道の在り方について

木村 香樹

これからの浄土真宗の伝道

鈴木 達也

悪人正機の研究

木村 香樹

親鸞の生死に関する一考察

鈴木 達也

— 法然上人と親鸞聖人の「悪人正機」の理解と比較 —

木村 香樹

現代における親鸞思想の意義

瀬戸嶋 涼

—現代の死生観を巡って—

他力本願とその誤解について

他利他の深義と三一問答から見る親鸞の信心観

ビハーラ活動の一考察

—仏教寺院の本来の役割について—

現代人の宗教観と死生観

真宗と同和問題

中世の社会と浄土真宗

—一向一揆を中心として—

浄土真宗と落語

—真宗における伝道の意味—

蓮如上人の研究

真宗における現世利益の一考察

現代社会における真宗伝道の一考察

真宗信仰と日常生活

頭如上人の研究

親鸞における伝道

真宗における阿弥陀仏像の成立史的考察

親鸞聖人と真仏における往生思想

浄土教美術にみる本尊の展開

信心と救済、今を生きる人間の救済

自死の宗教的解釈

現代人の死生観と浄土真宗

デザインコミュニケーションの視点から考える真宗伝道の

可能性

親鸞と現代

現代における伝道

—真宗僧侶の在り方について—

現代における浄土の意義

悪人正機説の考察

—その誤解と理解—

親鸞の信心決定と教義の伝承

親鸞聖人の人間観

—衆生往生の大乗仏教的根拠に関わる一考察—

真宗教義とキリスト教

—ルターとの比較を中心として—

歎異抄と現代社会の諸問題

浄土真宗の宗教体制と経営

浄土真宗における宗教教育

親鸞の死生観からみたへいのちの問題

親鸞像をめぐる

真宗における現代仏教音楽

—大前哲「交響讃歌《親鸞》」を中心に—

「信心正因」と「称名報恩」の問題

蓮如上人の伝道について

悪人正機の思想から学ぶ真宗における善悪の考察

中奥 沙希

中谷 太

仲邑 祥

中山 信知

中山 教昭

深 了悟

梨本 雄哉

西 唯頭

西田 暢子

西堀沙奈美

西村 武大

能口 祥子

灰谷 慎平

萩原 聡

萩山 教俊

橋本 正源

柱松 啓史

長谷川向真

親鸞の墨蹟

—その変遷と真蹟名号の力—

服部 雅

真宗における本尊について
現代人における宗教

三上 雄大

瞑想と三昧と親鸞

林 惟彰 コズモ

浄土真宗と現代社会の「絆」

三島 香

親鸞における信心獲得とその展開

早間 文融

浄土真宗の視点から見る教育問題

三星 佑紀

親鸞消息の研究

伴 建太郎

浄土真宗における葬儀の意義

皆川 利輝

ビハラについての一考察

日野 恭道

親鸞の浄土観

源 修道

親鸞の人間観と善悪

福田 晶

浄土教における菩提心について

三義 大貴

親鸞聖人の倫理観

藤 敬信

—特に法然・親鸞を中心として—

向井 愛美

今様と和讃の近縁性

藤木 千尋

—特に法然・親鸞を中心として—

武藤 自然

—『浄土和讃』—からみる極楽浄土への希求—

藤野久美子

自然法爾に見る他力救済の理論
親鸞聖人の御同朋・御同行の精神と宗教教育の可能性

武藤 広海

自死問題における宗教の役割

藤野久美子

現代における念仏の意義

宗 雷聞

—浄土真宗本願寺派の活動に学ぶ—

藤野久美子

現代における死後観の一考察

村上 順之

仏教用語からみる現代仏教

藤野 幸真

親鸞における三部経千部読誦中止の意義

盛 智照

現代における真宗伝道と安心

藤原 邦洋

親鸞の名号本尊について

森脇まい子

仏教と環境

藤原 唯衣

自死に対する一考察

柳井 恭平

—特に浄土真宗の立場から—

舟谷 真弥

親鸞聖人の信心の一考察

布施 晶子

親鸞における如来観

舟谷 真弥

親鸞聖人の信心の一考察

山下 和樹

親鸞の宗教体験と三願転入

古澤 恵慈

浄土真宗の役割と意義の一考察

山下 千聡

親鸞の悪人正機説に学ぶ

細野 貴文

真宗における妙好人像

山中 千聡

親鸞の生死観

増田 有香

伝統仏教と新宗教

弓場 一樹

『観無量寿経』の三心について

松谷 慧光

—浄土真宗と新宗教を比較して—

吉田 亘

—善導、法然、親鸞の三心観の比較を中心として—

松田 悠志

親鸞の本尊観

渡辺 尚一

真宗における人間観の一考察

松田 悠志

親鸞における信心の一考察

小山 靖

共生観について、特に親鸞の思想から

三井 香

真宗の生死観について

小山 靖

真宗保育について	五百井真依	親鸞の思想と終末医療	澤田 達昭
仏教文献における電子化の現状と可能性	小林 寛哉	親鸞の念仏思想	谷田 洋輔
真宗とターミナル・ケア	武智 早紀	親鸞における光明思想	土屋 松斎
―ターミナル・ケアにおける真宗の必要性―		親鸞の生死観	榛澤 正信
真宗と福祉について	東度 光平	文化、風俗の中の浄土真宗	藤原 望
―福祉がどう関わるか―		浄土真宗における救い	三和 真仁
親鸞聖人の生命観	内藤 雅俊	真宗の倫理観	弓場 正徳
―ビハラーの視点を通して―		石山合戦後の本願寺	照薫 正道
『歎異抄』の異義について	中島 翔希	―東西分派から龍谷大学の礎が築かれるまで	田代 浄明
真宗の救済について	西澤 傑	親鸞における苦悩の一考察	宮本ころ
―縁起思想と韋提希夫人の救い―		真宗における視聴覚伝道の一考察	元松 勇人
日本におけるビハラー活動について	島中 智子	浄土真宗と世界平和	
解脱の本質	帆足 童夢		
―真宗の教えから―			
仏教とターミナル・ケアについて	松岡 成美		
親鸞の釈尊観	日下 貴行		
―釈尊と阿弥陀仏の関係性―			
真宗と看取り	四柳 秀之		
現代人の生死観と真宗	内海 貴之		
真宗寺院の現状と課題	大塚 真慈		
浄土真宗と新宗教	岡本 健一		
―現代人における真宗と新宗教への意識―			
善導と親鸞の真実心の一考察	黒畑 勇太		
真宗における生死観の一考察	小井田善史		

龍谷大学
真宗学学会
員用

(永田文昌堂のみ有効)

編集後記

『真宗学』第一二八号をお届けします。

本号には、二〇一二年八月からハーバード大学に半年間の予定で留学中の真宗学教員 Dennis Hirota 先生の「Freedom Safe-guarded in Shiran and Heidegger」(親鸞とハイデガーにおける「自由」と「護念」の思想)、ならびに藤能成先生の「親鸞におけるへ仏智不思議」へはからひ」とは何か」と、玉木興慈先生の「煩惱成就と不断煩惱得涅槃」、さらには、二〇一一年度の真宗学大会発表の投稿論文で、現在、本学非常勤講師で浄土真宗本願寺派総合研究所に勤務する三浦真証氏の「近世初期真宗教学の変貌―私観子―からの考察―」、さらには現在、大学院博士課程の谷口智子氏の「存覚における父母に対する報恩思想―報恩記―を中心として―」の玉稿を掲載することができました。各位におかれてはご執筆いただきましたこと、篤くお礼申し上げます。特にHirota先生には留学の多忙の中、ご執筆いただきましたこと重ねてお礼申し上げます。

宗教はどのような宗教においても、いつの時代も統一的な理解を求めようとはします。それは理解の相違があると教えが混沌とし、混乱を招くからでしょう。しかし、逆に選択枝があるということは、宗教が活動的であり躍動感に満ちているということではないでしょうか。それゆえ選択ができるということは、まだしも健全なことだろうと思われまます。選択枝がなくなった時の宗教の形とはどのようなものか、については、それは正しいかも知れないが意味のない硬直した宗教の姿ということになるでしょう。それゆえ、時代の変化の中において、われわれは変化に相応した選択枝をたえず作り出す努力をこそ続けなければならないのではないか、と思います。

最後になりましたが、真宗学運営協議会の院生・学部生の皆さんには、本誌掲載の真宗学科関係、学会運営に関する諸記録の執筆等、多大の尽力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

(川添 泰信記)

平成二十五年三月十日印刷
平成二十五年三月十五日発行

編集者 真宗学
編集委員

転載) 真宗学会長
内藤 知康

印刷所 (株) 図書同朋舎

〒105-8366
京都市下京区七条大宮

発行所 龍谷大学真宗学云
電話 (0)75-343-332番
振替 0100168746番

取次店 永田文昌堂
京都市下京区花屋町通西海院西入
振替 0100149366番

CONTENTS

- Bhudda's Inconceivable Wisdom in Shinran
—What Is the Culcation?—.....Yoshinari FUJI (1)
- A Study of Shinran's Usages of the Expressions "Beings Possessed
of Blind Passions" and "Nirvana is Attained without Severing
Blind Passions"Kouji TAMAKI (37)
- The Change of Early Stages of Modern Times Education
—Consideration from Shikanshi—
.....Shinsyo MIURA (59)
- Zonkaku's Conception of Indebtedness to Parents:
Focusing on the Houonki
.....Tomoko TANIGUCHI (80)
- Freedom and Safe-guardedness in Shinran and Heidegger
.....Dennis HIROTA (1)

SHINSHUGAKU

JOURNAL
OF
SHIN BUDDHIST STUDIES

Nos. 128

March 2013

SHINSHU GAKKAI

Research Association of Shin Buddhist Studies

Ryukoku University

Shichijo Omiya, Shimogyo-ku

Kyoto, Japan